

ギャンブル問題の今を知り、看護師の立場から考えよう！ わたしたちにできること

○吉井 ひろ子¹⁾，長岡 陽子²⁾，坂本 拳³⁾，大野 さゆり²⁾

1) 関西医科大学総合医療センター，

2) 公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会(ギャンブル障害者を家族にもつナーズ部)，

3) 一般社団法人グレイス・ロード(ギャンブル依存症回復施設) 甲斐サポートセンター

日本は、既にギャンブル大国といわれています(尋木,2014)。カジノを所有していないわが国のパチンコやパチスロの収益は、カジノを所有している北米やマカオに次いで世界第3位(3兆6,300億円)です。これは、ヨーロッパ全体の5倍に近い(ギャンブル障害研究グループ,2018)といわれています。また、2016～2018年度の疫学調査(松下,2018)では、ギャンブル障害が疑われる者の推計値(過去1年間)は、生涯経験は3.6%(約320万人)で、疑いのある者は成人人口の0.8%(約70万人)といわれています。このうえ、地域経済振興を目的とした統合型リゾート事業(IR事業)の参入に伴うカジノ開設が実現すると、さらなるギャンブル障害者や犯罪などの増加を懸念する声が多くなっています(鶴田・十代田・津々見,2021)。このように、ギャンブル問題は、わが国の重要な社会問題と位置づけられています(厚生労働省,2020)。このワークショップの目的は、ギャンブル問題の今をお伝えし、共に看護師の立場からできる啓発に関する具体的な行

動についてヒントをみつけるための意見交流会です。前半は、ギャンブル障害をはじめとする嗜癖に関する基本的な知識を共有し、中盤はみなさんと同じ看護師であり、かつ、当事者と家族の立場から体験談を語っていただきます。最後に、誰でもできる小さな啓発活動について、会場のみなさまと意見を交換する予定です。また、このたび、自助グループメンバーで集う”ギャンブル障害者を家族にもつナーズ部”が新設されました。メンバーのリカバリーに関する調査結果と共に、活動内容をご案内させていただきます。職場やご家庭でも使える情報を手土産にさせていただけるようご準備をしておきますので、ご関心が少しでもおありでしたら、お足をお運びいただけますよう、よろしく願いいたします。なお、倫理的配慮として、参加者間の意見交換に関するプライバシーを遵守するため、本ワークショップ内だけの取り扱いとさせていただきます。ご理解とご協力の程、よろしく願いいたします。